

## 編集委員からの 2 つの「論点」について

Ohri Richa

Ohri (2005) に対して、ご指摘やご助言を「リテラシーズ」編集委員会 (2005) よりいただきました。以下、2 つの「論点」について回答を述べさせていただきます。

### 1 論点 1

ステレオタイプ構築は母語話者・非母語話者を問わず、絶えず行なわれているという事実があるのに、本論文ではなぜ「母語話者・非母語話者」という図式に拘ったのかというご指摘については、以下の点を主張したい。

第一に、本研究のきっかけになったのは、筆者自身の長期滞在型の「非母語話者」としての経験である。これまでの非母語話者としての経験の中には、母語話者との相互行為の中でいくらか「共生」を心がけても、そこには一種の「不快感」や「無力さ」を感じさせる瞬間があった。それは何なのか。どこから来るのか。その答えはまだ見つかっていないが、ただ一つ言えることがある。「不快感」や「無力さ」を感じさせるのは、B の私が A さんと話した結果生じるものではなく、マジョリティとして力を持っている母語話者の A さんと話したから生じるものである。つまり、不平等な力関係がその会話の中で生産されているから無力さを感じるのである。

マジョリティである母語話者だけを取り出して批判の対象にするのは偏った見方ではあるが、マジョリティ (dominant) とマイノリティ (non-dominant) という関係性の中には支配する (dominate) 側とされる側が当然存在し、このような力関係の観点から議論する必要があると思う。力の再生産には、本論文で主張したとおりに目に見えるものと目に見えないものがある。目に見えないものとは例えば、イデオロギーの押し付けのようなものである。イデオロ

ギーの押し付けは、無論母語話者—非母語話者だから存在するのではない。どのような関係性にもあり得る話だが、定住型非母語話者や長期滞在型非母語話者が急激に増え、また共生論が活発になっている近年、母語話者と非母語話者という観点からそのイデオロギーの押し付けを「問題」化していく必要があると思う。

さらに言えば、このようなトピックが日本語教育において「問題」化されてこなかったからこそ、批判的なメスを入れる必要があるのではないだろうか。これは社会学の領域では既に論じられているかもしれないが、母語話者も非母語話者もコミュニケーションの手段として「日本語」を使っている以上、その日本語、またその教育現場を中立的な立場からだけではなく、主観的な立場から観察し、その改善策を探る必要があると思う。

第二に、「リテラシーズ」編集委員会 (2005) のご指摘どおり、母語話者・非母語話者を問わずステレオタイプ化は、絶えず行なわれているという事実をはっきり押さえた上で分析が必要であると思うが、今回そうしなかった理由は本研究の分析方法 (批判的談話分析) にある。批判的談話分析の主な目的は、マジョリティなどのような elite groups (van Dijk, 1993) がどのように力関係の再生産に参与するのかを明らかにすることにある。

批判的談話分析について van Dijk (1993) は次のように述べている。

“... a study of the relations between discourse, power, dominance, social inequality and the position of the discourse analyst in such social relationships. ... by focusing on the role of discourse in the (re)production of

and challenge of dominance. Dominance is defined here as the exercise of social power by elites... that results in social inequality...” (pp.249-250)

“... we pay more attention to ‘top-down’ relations of dominance... this does not mean that we see power and dominance merely as unilaterally ‘imposed’ on others... our critical approach prefers to focus on the elites and their discursive strategies for the maintenance of inequality.” (p.250)

## 2 論点2

「リテラシーズ」編集委員会（2005）のご指摘とおり、「相互学習型活動」の教育環境や教育目的が本来の批判の対象となるべきだが、本研究ではその第一段階として、まず「相互学習型活動」という場をミクロ的（且つ批判的）に分析することによって、その場において観察されたステレオタイプの実態を明らかにした。このような「問題」を提起したのは批判的談話分析という方法論を採用したためだと言えよう。つまり、上述したように... position of the discourse analyst in such social relationships... が重要であり、ある関係性の中で（例えば、母語話者と非母語話者という関係性）何を、どのように「問題」と感じるかが重要ではないかと思う。この点こそが森本（2001）との根本的な違いである。

「相互学習型活動」の教育環境や教育目的への批判についての「リテラシーズ」編集委員会（2005）のご指摘は、筆者の最終的な目標であり、そこに向けて批判ならびに提言をしていきたいと考えているが、さらに研究を深めた上で述べたく、今後の課題とさせていただきたい。

## 文献

Ohri Richa (2005) 母語話者による非母語話者のステレオタイプ構築—批判的談話分析の観点から『WEB 版リテラシーズ』2(1). くろしお出版.  
URL: <http://www.kurosio.mine.nu/21web/>

森本郁代（2001）地域日本語教育の批判的な再検討—ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して. 野呂香代子・山下仁（編）『正しさへの問い—批判的社会言語学の試み』215-247. 三元社.

「リテラシーズ」編集委員会（2005）編集委員からの2つの「論点」『WEB 版リテラシーズ』2(1). くろしお出版.

URL: <http://www.kurosio.mine.nu/21web/>  
van Dijk, T. (1993) Principles of critical discourse analysis. *Discourse and Society*, 4(2), 249-283.